



サウジアラビア：インドを抜いて世界最大の武器輸入国に

3月8日、軍事情報専門社の「IHS ジェーンズ」は、同社がとりまとめた報告書によると、2014年のサウジアラビアの武器輸入額は65億ドルであり、インド（54億ドル）を抜いて世界最大の武器輸入国になったと報じた。同報告書によると、2015年のサウジアラビアの武器輸入額は前年比52%増の98億ドルに達し、世界の武器輸入額の7分の1をサウジアラビアが占める見込みである。

評価

サウジアラビアは近年、PAC3 ミサイル防衛システムやユーロファイター・タイフーン戦闘機など、米国・英国等からの武器調達を活発に進めている。ストックホルム国際平和研究所が発表している統計データによると、サウジアラビアの軍事費は2011年以降、毎年15%を超える上昇幅を記録し続けている。国際戦略研究所（IISS）が発行している最新の「ミリタリー・バランス」によると、2014年のサウジアラビアの軍事費は808億ドルとなり、米国、中国に次いで世界第3位の支出額である（第4位はロシア、第5位は英国。日本は第7位）。

これらの軍事費の増額は、2011年以降石油価格が高止まりし、政府収入が大幅に増加したことで可能となった。同様の傾向はUAEを始めとするその他の湾岸諸国にもあり、GCC諸国の軍は急速に近代化を進めている。

しかしながら、その軍事費の大きさに比して、サウジアラビア軍の能力が、米、中、露に比肩するレベルに達しているかといえ、必ずしもそうではない。兵員数の少なさに加え、最新鋭の兵器を運用するだけの練度に欠けることがしばしば指摘されている。現代における軍の運用では、情報処理システムを統合し、迅速な意思決定をすることが求められており、最先端のミサイル防衛システムや戦闘機はこれらの情報処理システムを活用することで最大限の効果が発揮できるよう設計されている。サウジアラビア軍にはまだこれらの情報処理システムを単独で運用するだけの能力は備わっておらず、米軍からの手厚い支援を受けることによって、軍としての活動が可能となっている。このことから、軍事費の拡大や武器輸入額の増加のみによって、サウジアラビアの軍事的な能力が向上していると判断することは早計であろう。

とはいえ、より長期的な観点からは、域内の軍事バランスに変化が現れるだろう。従来は、サウジアラビア側がイラン・イラクに対して劣勢であり、米軍が湾岸諸国に駐留することでバランスを保っているとされてきたが、湾岸諸国の軍事力が向上することで、これまでとは異なる構図が生じることになるかもしれない。

（村上研究員）

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

◎各種情報、お問い合わせは中東調査会 HP をご覧ください。URL : <http://www.mei.j.or.jp/>